



上:B.S.ライマンの夕張川探査に関するフィールドワーク風景より

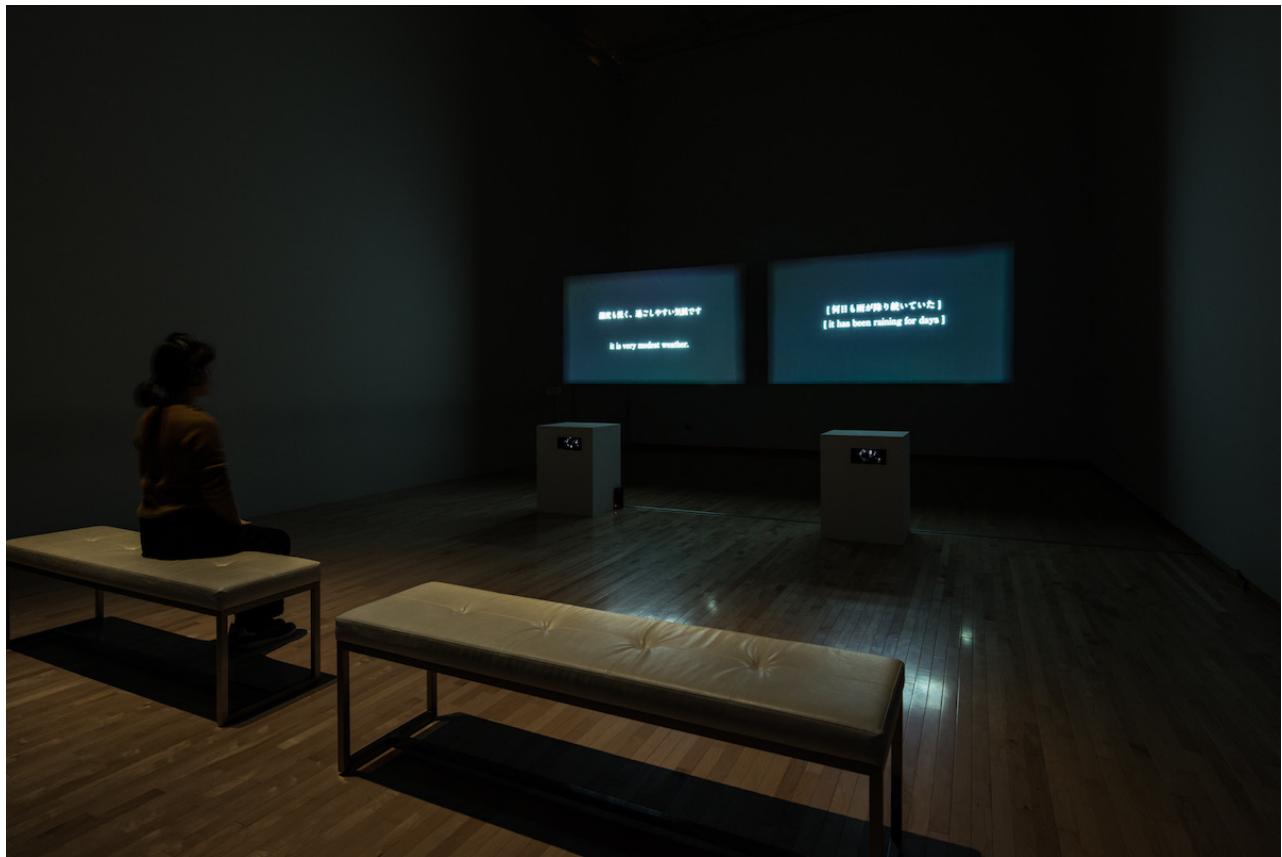
## THE WAY I HEAR, B.S.LYMAN

### B.S. ライマン(1835-1920)

明治初期、近代化を急ぐ日本政府によって鉱山技士、地質学者として、また日本人技士の養成のために「お雇い外国人」の一人として1873年(明治6年)に来日。当時まだ「蝦夷」とも呼ばれていた北海道に赴き、3年(通算約12ヶ月)間の精細な地質調査を行い数々の記録やフィールドノートを残すとともに、開拓使より「北海道地質総論」を出版した。その後、開拓使や政府の一部と関係が悪化、解雇されるものの、ライマンは私費を投じる形で日本初の総合的な地質地図「日本蝦夷地質要略之図」を出版。それは当時としては最新印刷技術であったリトグラフを採用した日英バイリンガルのカラフルな地質図であった。彼が調査現場で育て上げた助手達は後に日本のエネルギー開発現場において重要な役割を果たすことになる。

### リサーチ

B.S.ライマンに関する資料リサーチと平行し、2013年8月、北海道にて1ヶ月間のフィールドリサーチを行った。北海道大学付属図書館北方資料室、夕張地域史の専門家などの助言や資料提供を受けながらライマンの夕張川探査行の正確なルートや重要なロケーションの特定などを進めるに同時に、アウトドア専門家達と当時と同じような植生や川の状態と思われるロケーションでカヌーによる川の遡上を行うなど可能な限り探査行がどういったものであったかという調査も行った。そういう調査現場では音風景のリスニングメモや録音を行った。その後、2014年1月にはライマンが残した膨大な蔵書や自筆フィールドノートなどを所蔵するマサチューセッツ大学アマースト校を訪れ、大学図書館特別コレクション室にある資料の調査を行った。そしてライマンが夕張を訪れてから100年後2014年6月19日、再び夕張へと向かいフィールドワークなどを行った。その年はある種の異常気象であり、偶然にもライマンが探査を行った時と同様の気象条件でもあった。



MOTコレクション いま一かつて 複数のパースペクティブ、東京都現代美術館、東京、2019

## THE WAY I HEAR, B.S.LYMAN 第五章 協想のためのポリフォニー

2チャンネル テキスト・フィルム、ステレオ、日本蝦夷地質要略之図(レプリカ)、カッティングレター、2015

MOTコレクション いま一かつて 複数のパースペクティブ、東京都現代美術館、東京、2019

作品リンク: [http://afewnotes.com/TWIH\\_LYMAN\\_viewing.html](http://afewnotes.com/TWIH_LYMAN_viewing.html)

明治政府に雇用され、北海道の地質調査を行ったアメリカ人地質学者・鉱山技師であるベンジャミン・スミス・ライマンは、夕張川の調査をしていた1874年6月19日、川岸に塊炭を見つけ、その他に大きな炭層が眠ることを確信する。その後、彼の助手によって日本最大の石狩炭田の一部をなす夕張炭田が発見され、それは炭鉱の街としての夕張の発展をもたらし、ひいては日本の近代化を促進するエネルギー源となった。それならば、ライマンが塊炭をはっけんしたその瞬間は、そのずっと先にあるいまここにも接続しているのではないか。mamoruはその想像を巡らせるべく、ライマンが残した膨大な調査記録や文献を調査し、実際に夕張へ赴いて彼が率いた調査団の足取りをたどりながら、ライマンが聞いたであろう音を採取した。それらをベースにした<THE WAY I HEAR, B.S.LYMAN 第五章 協想のためのポリフォニー>と題された作品は、テキストとサウンドを中心構成されるインスタレーションである。ライマンとmamoruそれぞれが訪れた、異なる時代の同じ場所についての断片的な記録と記憶が、二つのスクリーン上のテキストと、聴こえてくる言葉として呼応とズレを繰り返しながら、さまざまなイメージや音の風景を鑑賞者に彷彿させる。それは、直接的には経験することのできない時空間へと、聴くことを通じてアクセスする試みであるともいえる。

崔 敬華(キュレーター、東京都現代美術館)、「他人の時間」カタログ、p78、2015



MOTコレクション いま一かつて 複数のパースペクティブ、東京都現代美術館、東京、2019

**THE WAY I HEAR B.S.LYMAN 第五章 協想のための  
ポリフォニー**

**The 5th Movement Polyphony for Collective  
Imagination**

**I. 川 River**

**II. 男達の話し声 Some Men Start Talking**

**III. 19 June, 1874 / 2014**

**IV. 出発 Departure**

**V. 石炭 Coal**



TOKYO STORY 2014、トーキョーワンダーサイト本郷、東京、2014

## THE WAY I HEAR, B.S.LYMAN 第四章 独想曲「19, June 1874」

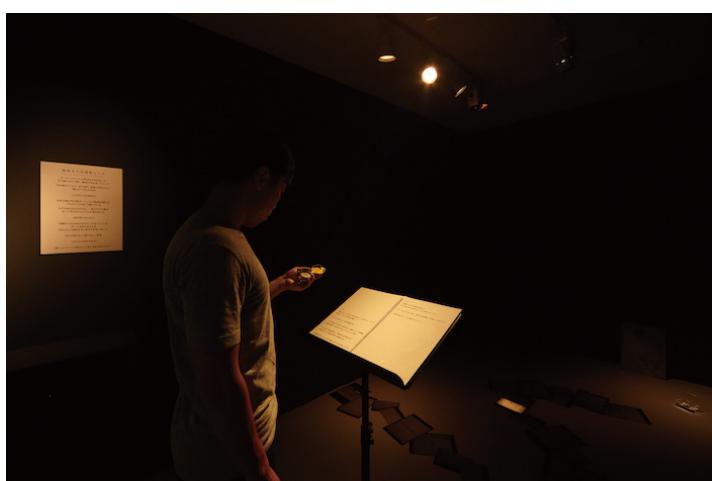
サイズ可変、テキスト、「日本蝦夷地質要略之図」(レプリカ)、譜面台、プリズマティックコンパス、B.S. ライマンのフィールドノート(レーザープリント画像)、夕張川上流域の川原で採取した石炭塊と川原の画像(インクジェットプリント)、照明

鑑賞者は、展示空間に左壁に配置された「前奏または前想として」という前書きを読み、真下にある棚に載せられたコンパスとテキスト楽譜<第四章「19, June 1874」>を手にし、楽譜を譜面台に載せ読み進める。作品の中核となるこのテキスト楽譜は、B.S. ライマンの北海道地質調査旅行の中から、夕張川での踏査の際に川原で石炭塊を発見する場面の前後を含めた調査をとりあげており、想者/奏者はテキストに描かれる音風景の移り変わりを通じて追想する。途中、テキストに挿入されるインストラクションによって鑑賞者はコンパスで方角を確認したり、夕張川調査で実際に発見した石炭塊に触れる動作を促される。床に置かれた小さなアクリルケースと石炭塊、川原の写真、プリントアウト画像(ライマンのフィールドノートの川のスケッチをつないで川を再現したもの)、右壁に配置した「日本蝦夷地質要略之図」(複製)によるインスタレーションは追想のための舞台装置として機能する。



<「I. 夜明け」より抜粋 >

夜通し降りつづいた雨は、朝になってようやくあがった。  
空はまだ曇ってはいるものの、今日はなんとか持ちそうだ。  
川の様子はと言うと、泥の混じり気が少し減った様に思うが  
白く濁っていて川底は見えない。  
(あなたも足下に目をやり「川の色」を確認する)  
連日の雨で水かさが増した川は滔々と流れている。  
(その川に耳を澄ます)  
川の向こう側ではハルゼミがあちらこちらで鳴き始め、  
周囲のしげみからはベニマンコの声高で透明な短いさえずり  
ハンノキの葉をつたって雨が滴りおちる



<「II. 出発」より抜粋 >

7:10 7艘のカヌー(丸木舟)を川に浮かべ、それぞれ3、4人ずつ 乗り込み、川上へ向け踏査を開始。  
(コンパスを手にとり、方位を確認する)  
ノートに方位(Nと矢印)を書き入れ、川筋のスケッチを開始。川は北東  
へ伸び、ゆるやかに東へとカーブしていく様子。  
カヌーはすべる様に動き出し、(風があなたの頬をなで) すぐ後ろからアイ  
ヌ達が舟を漕ぐ音が聞こえる。  
川の両岸にはどこまでも広がる湿原。所々に木が点在している。時折、ク  
サキリ虫がチチッと鳴いている。

7:16

右側から小さな渓流が流れ込み、川と交わる音が次第にはつきりと聞  
こえてくる。  
カヌーはよどみなく進み、船先で水が割れ、心地よい音がする。(渓流の  
音はゆっくりと遠ざかっていく)



<「IV. 炭塊」より抜粋 >

砂浜を歩き回る足音  
小石を拾っては、投げ捨て、また拾いながら、  
何かをつぶやき、時折、鉛筆でメモを取る  
ハルゼミの合唱と川の音にまぎれて、  
対岸のしげみからはエゾセンニュウの鳴き声  
耳元を羽虫が通りすぎる



<「IV. 炭塊」より抜粋 >

少し離れたところから「ライマン先生!」と、  
誰かが興奮気味に呼ぶ声が聞こえる。  
彼は水際に立ち、こちらに向かって手を降っている。  
幾つもの足音が彼の周囲にあつまる  
皆の視線の先には、黒く小さな塊があった  
(あなたの視線の先にもそれはある)  
私はその塊を水から拾い上げ、  
(あなたも近づいて、ケースを開き、塊を手にする)  
その軽さを確かめ、思わずこう言った、  
(あなたもその軽さを確かめ、その言葉を発する)  
"Coal Pebbles!" (炭塊だ!)